

周辺遺跡からみた寺町廃寺創建の歴史的背景

三次市文化財保護委員会

委員長 加藤 光臣

1 はじめに

律令国家形成期ともいえる7世紀後半代に、当時の三谷郡三谷郷の領域に白鳳期の寺町廃寺が創建された。寺町廃寺跡は、平安時代初期（9世紀前葉頃）編纂の『日本霊異記』（最古の仏教説話集）記載の三谷郡「三谷寺」に比定する研究がすでに明治時代の段階でみられ、以来古代の文献に登場する寺院として様々な研究・議論が行われて全国的にも著名となっている。また、1974年以来の発掘調査によって「法起寺式」の整然たる伽藍配置が確認されるとともに、当時の政治の中心地である畿内地方の寺院跡と比べても遜色のない内容を示すことが明らかとなった。

では、このような際立つ特色を窺わせる壮麗な寺院が、一体なぜ中国山間地の三次盆地に創建されたのか。その謎に迫るために、寺町廃寺出現前の歴史的背景を周辺遺跡の特色から考えてみた。

2 古墳時代の社会と寺町廃寺創建の歴史的背景

寺町廃寺跡が備後北部地域最古の寺院として創建された背景には、寺町廃寺出現以前の三次盆地の歴史的特質が深く関係していたと考えられる。

三次盆地の考古学的調査・研究によってこれまでに明らかにされた遺跡の特色を概観するならば、特に古代の飛鳥・白鳳期（7世紀代）の前時代である古墳時代（4～6世紀代中心）の三次盆地は、とりわけ強い地域的独自性を発揮し続けた地域として注目される。

三次盆地は、広島県内の古墳数（約12,000基）の三分の一に相当する4,000基近い古墳が集中的に存在する地域として有名であり、これまで広く研究者たちからも注目されてきた。では、中国山地中央部のそれほど広くもない山間盆地で、しかも河川が集合するがゆえに低平地の多くは氾濫原で水害に遭うことも多く、田畑の生産力も決して豊かとはいえない地域に、なぜこれほど多くの古墳が築かれたのか？……これまで様々な考え方が提示されてきたものの、いまだ納得できる明確な解答が得られていない大きな謎なのである。

今回この古墳時代の謎が、備後北部地域最古の秀麗な寺院として三次盆地に寺町廃寺が出現した背景に大きな要因として脈絡・連動しているのではないかと考えてみた。

三次盆地の古墳時代の社会の謎を解く主なキーワードとして、①畿内地方の「倭（ヤマト）王権」との関係性、②朝鮮半島からの「渡来系要素」との関係性、③経済的要素としての「鉄器及び鉄」の生産の3点を掲げることができるのではない

か。そして、この三大要素が複雑に絡み合っただ次盆地の古墳時代の歴史的性質が醸成されたものとする。以下、この三要素の内容や相互の関係性について記す。

倭王権は日本列島全域への政治的影響力の拡大のため、沿岸部のみならず山間地域の交通・流通網の掌握に努めることとなる。このような状況下で、山陽・山陰の多方向へ繋がる中国山間地の交通の要衝地である三次盆地は、すでに古墳時代前期の4世紀代には倭王権の影響力拡大の戦略上の適地に位置づけられた可能性が高い。それゆえに、古墳時代を通じて倭王権による三次盆地への断続的な政治的介入があったものと想定される。

たとえば倭王権との強い関係性が、5世紀前葉頃の三次盆地最大規模の県史跡糸井大塚古墳（糸井町：墳長65mの帆立貝形古墳、径110mを越える幅20mの周堤帯で囲む）を出現させるとともに、規制と政治的役割の下で5世紀代を通じて「帆立貝形」古墳が際立って多い地域性を生じさせることとなったのであろう。

また、5世紀後葉の県史跡酒屋高塚古墳（西酒屋町：推定墳長46mの帆立貝形古墳）から出土した画文帯獣帯鏡は、全国で出土した26面の同型鏡の1枚であり、倭王権直属の武官的な地方首長層へ配布されたとも考えられている。まさに当時の三次盆地と倭王権との直接的関係を物語るものであろう。このような密接な倭王権との関係が、国史跡浄楽寺・セツ塚古墳群（高杉町：総計176基）に代表されるように、5世紀後葉以降に異常な数の古墳を生じさせた一要因（倭王権の兵站地的役割を担ったか？）とも考えられる。一方、酒屋高塚古墳出土の円筒埴輪には備中地方独特の製作技法が見出され、当時の備中地方との深い繋がりも明示する。後の寺町廃寺創建時の関係性の前提的背景ともいえよう。

ところで、5世紀代の古墳には当時の朝鮮半島からの渡来人との関係を示唆する渡来系要素もしばしば見出される。たとえば、武具の鉄製短甲（よろい）を出土した5世紀後半の県史跡三玉大塚古墳（吉舎町：墳長41mの帆立貝形古墳）では、豊富な副葬品とともに鉄製の鍔（カスガイ）や朝鮮半島南部製ともされる筒形銅器（槍・矛・杖等の柄の下端に取付けた筒状青銅器）も出土している。また、酒屋高塚古墳では釘が出土している。しかも、竪穴式石室は渡来系の特色を示すとも指摘されている。5世紀代の埋葬棺への鍔や釘は全国的にも少なく、渡来人との強い関連を示す遺物である。そのほか、半島製と考えられる初期須恵器を出土した古墳も散見される。古墳以外では、三重遺跡（四拾貫町）の5世紀後葉の竪穴住居跡で朝鮮半島源流のオンドル遺構ともよばれるL字状カマドが検出されている。三次盆地では唯一例であるが、渡来人によって造られた可能性が極めて高いといえよう。

倭王権は、河川による氾濫原の制御は難しいゆえに田畑の生産力に乏しい三次盆地の開発を強力にバックアップしたのではないか。そのために、大陸の最新技術を担った渡来系の人々を三次盆地へ送り込んだ可能性が高い。彼らの主導で井堰・築堤による河川・池等の治水・水利や水田・畑地開発のための土木技術や冶金など

鉄器生産の新技术を導入して盆地内の開発が進められたと推測される。

平安中期の『倭名類聚抄』では、三谷郡は「三谷・松部（私部=きさいべの誤記とされる）・江田・額田（ぬかた）・刑部（おさかべ）」の5郷が記され、名代部（大王家=皇族が所有する部民）に由来する郷名が3郷も集中しており、三谷郡と倭王権の深い関係性を明示している。一方、三次郡は「上次（かみすき）・幡次（はたすき）・下次（しもすき）・布努（ふぬ）」の4郷とされるが、三次は本来「みすき」と称され古代朝鮮語の「スキ=村」を表したとも考えられている。三次盆地と渡来系の人々との深い関わりを伝えている可能性が高く、古墳時代の遺構・遺物の渡来系要素も、当時の同様な社会状況を物語るものではなかろうか。また、寺町廃寺の創建時には渡来系の流れを汲む人々による全面的支援があった可能性も高かろう。

なお、備後北部では、すでに5世紀中葉～後半頃には鍛冶工房を伴う集落跡（庄原市大成遺跡）が出現し、6世紀代には進んだ鍛冶技術（スサ入り粘土による地上式鍛冶炉など）も普及する。しかも、7世紀前後頃には白ヶ迫製鉄遺跡（三良坂町）の発見で鉄そのものの生産活動も明らかとなった。6世紀後半以降には大半の集落遺跡で鍛冶炉や鉄滓が検出され、鉄器製造の普遍化が窺える。さらに7世紀以降には道ヶ曾根遺跡・野竹遺跡（三良坂町灰塚）のように、鍛冶生産を専門的に行い円面硯（スズリ）や墨書土器も伴うことから公的役割を担ったと想定できる大規模な集落跡が成立するなど、飛躍的に鉄及び鉄器の生産力を高めることとなる（表）。

朝鮮半島からの鉄素材の輸入に依存していた倭王権は、早い時期から中国山地での鉄確保を模索した可能性が高く、そのためにも新たな冶金の知識や技術をもつ渡来系の人々の三次盆地への移入や積極的な支援を行ったのではなかろうか。

現状では、岡山県の備中で6世紀中葉～後半頃の日本列島内最古の製鉄炉（総社市千引カナクロ谷遺跡）が確認されているが、白ヶ迫遺跡の発見はさほどの遅れなく三次盆地でも鉄生産が開始されたことを明示している。これまでの倭王権並びに備中地方や渡来系の人々との強い関係性を背景に、備中の製鉄技術が備後北部へも早い段階で導入された可能性も推測され、今後の更なる検討が必要であろう。

ところで、鍛冶生産が伸張していく6世紀には、三次盆地で新たな前方後円墳が出現する。5世紀代とは異なり、墳長30m未満で15～20m前後にすぎない小規模な小型前方後円墳が異常に多く造られる。他の地域ではすでに前方後円墳の減少化もしくは築造停止の動向を示す中で、全く真逆の特異な現象を生じるのである。

現在確認できている三次盆地の前方後円墳（帆立貝形古墳含む）80基のうち約58基（72.5%）が後期に属すると推測される。とりわけ、寺町廃寺跡周辺の向江田町～和知町地区の丘陵地は、円墳の横穴式石室墳と共に小型前方後円墳が最も集中する地域であり（図）、古墳築造の新たな墓域が形成されたかの感も強い。小型前方後円墳の爆発的ともいえる築造と前方後円墳の墳形への固執は、当時の大きな政治変動や鉄器生産を背景とした中小の新興豪族層の成長を示唆するとともに、

表 備後北部地域の製鉄及び鍛冶関連遺跡一覧

遺跡名	所在地	時期	特色内容	備考
白ヶ迫製鉄遺跡	三次市三良坂町	6世紀末～7世紀前葉	円筒形堅形製鉄炉2	原料砂鉄
小和田遺跡	庄原市新庄町	7世紀後半～8世紀	製鉄炉4(円筒形・方形)＋集落跡:鉄滓	原料鉄鉱石
常定峯双製鉄遺跡	庄原市口和町	6世紀末～7世紀前半	円筒形堅形製鉄炉2	
戸の丸山製鉄遺跡	庄原市濁川町	7世紀代?	長方形箱形製鉄炉1	原料砂鉄
植松遺跡炭窯跡	三次市三良坂町	7世紀中葉～後半	横口付炭窯1	
南山遺跡炭窯跡	三次市有原町	7世紀後半～8世紀代	横口付炭窯2	
弘法山炭窯跡	三次市甲奴町	?	横口付炭窯1	
常定峯双炭窯跡	庄原市口和町	6世紀後半代?	横口付炭窯1	
皇塩遺跡炭窯跡	庄原市水越町	6世紀末～7世紀前半	横口付炭窯2	
野田大山山炭窯跡	庄原市東城町	?	横口付炭窯1	
善正平2号遺跡	三次市甲奴町	7世紀前葉～後半	集落跡:鍛冶炉, 鉄滓(精錬滓・鍛錬滓), 轆羽口, 製鉄炉壁片, 製塩土器	原料鉄鉱石
道ヶ曾根遺跡	三次市三良坂町	7世紀後半～8世紀前半	集落跡:鍛冶炉, 鉄滓(製錬滓), 鉄塊系遺物	原料砂鉄
見尾東遺跡	三次市三良坂町	6世紀末～7世紀前葉	集落跡:鍛冶炉, (砂鉄精錬滓・鍛錬滓, 鉄鉱石製錬滓)	原料砂鉄・鉄鉱石
見尾西遺跡	三次市三良坂町	6世紀末～7世紀前葉	集落跡:鍛冶炉, 鉄滓(砂鉄製錬滓・精錬滓・鍛錬滓), 鍛造剥片, 轆羽口	原料砂鉄
杉谷B・C地点遺跡	三次市三良坂町	6世紀後葉～7世紀前半	集落跡:鉄滓(砂鉄精錬滓, 鉄鉱石製錬滓・鍛錬滓)	原料砂鉄・鉄鉱石
野竹遺跡	三次市三良坂町	8世紀中葉～9世紀前葉	集落跡:鉄滓(製錬滓, 鍛錬滓), 轆羽口	原料砂鉄
重岡山遺跡	三次市大田幸町	6世紀末～7世紀前半	集落跡:鉄滓	
宮の本遺跡	三次市向江田町	7世紀前半	集落後:鍛冶炉, 鉄滓	
三重1号遺跡	三次市四拾貫町	6世紀中葉・7世紀前半	集落跡:製塩土器, 鍛冶炉, 鉄滓(砂鉄製錬滓・精錬滓, 鉄鉱石鍛錬滓)	原料砂鉄・鉄鉱石
和知白鳥遺跡	三次市四拾貫町	6世紀前半～6世紀中葉	集落跡:鉄滓, 製塩土器	
松ヶ迫A地点遺跡	三次市東酒屋町	6世紀後葉	集落跡:鍛冶炉・鉄床石・鉄滓	
松ヶ迫B地点遺跡	三次市東酒屋町	6世紀後葉～7世紀中葉	集落跡:鍛冶炉・鉄床石・轆羽口, 鉄滓	原料砂鉄
松ヶ迫F地点遺跡	三次市東酒屋町	6世紀中葉・7世紀代全般	集落跡:鍛冶炉・鉄床石, 鉄滓, 製塩土器(6世紀中葉)	
松ヶ迫神田遺跡	三次市東酒屋町	7世紀前半	集落跡:鉄滓	松ヶ迫G地点遺跡
緑岩遺跡	三次市東酒屋町	6世紀後葉	集落跡:鍛冶炉, 鉄滓	
下本谷遺跡	三次市西酒屋町	7～8世紀	郡衙跡・集落跡:鉄滓, 鍛造剥片・轆羽口	三次郡衙跡
大歳遺跡	三次市下志和地町	7世紀前半	集落跡:鉄滓(製錬滓)	原料砂鉄
向泉川平2号遺跡	庄原市口和町	7世紀前半	集落跡:製塩土器	
馬ヶ段遺跡	庄原市水越町	6世紀末～7世紀前半	集落跡:鉄滓(鍛錬滓), 製塩土器	
西山遺跡	庄原市新庄町	6世紀末～7世紀初頭	集落跡:鉄滓	
小和田遺跡	庄原市新庄町	7世紀前半	集落跡:鍛冶炉, 鉄滓	
浅谷山東B地点遺跡	庄原市上原町	7世紀前半	集落跡:鍛冶関係鉄滓(精錬滓), 炉壁片	原料鉄鉱石
清水3号遺跡	庄原市上原町	7世紀前半	集落跡:鍛冶関係鉄滓(砂鉄精錬滓・鉄鉱石製錬滓), 炉壁片	原料砂鉄・鉄鉱石
岡山A地点遺跡	庄原市上原町	7世紀前半～後半	集落跡:鍛冶関係鉄滓(砂鉄製錬滓・精錬滓, 鉄鉱石精錬滓), 製錬炉壁	原料鉄砂・鉄鉱石
大成遺跡	庄原市三日月町	5世紀中葉～6世紀初頭	集落跡:鍛冶関係鉄滓(精錬滓), 轆羽口, 製塩土器	原料鉄鉱石
則清1号遺跡	庄原市是松町	6世紀後半～7世紀初頭	集落跡:鍛冶炉, 鉄滓(精錬滓・鍛錬滓), 鉄鉱石, 鍛造剥片	原料鉄鉱石
境ヶ谷遺跡	庄原市川西町	6世紀初頭～中葉	集落跡:屋外鍛冶炉2, 鉄滓, 轆羽口, 約300gの砂鉄, 製塩土器	炉・砂鉄の時期?
布掛遺跡	庄原市川西町	5・6世紀代	集落跡:鉄滓, 轆羽口, 製塩土器	
宮脇遺跡	庄原市高町	7世紀後半	集落跡:鍛冶炉, 鉄滓(精錬滓), 鍛造剥片, 鉄床石, 轆羽口	原料砂鉄
常納原遺跡	庄原市西城町	6世紀末～7世紀初頭	集落跡:鍛冶関係鉄滓(鍛錬鍛冶滓), 7.5kgの鉄鉱石, 鍛冶炉壁片	
牛乗遺跡	庄原市本村町	6世紀末～8世紀	集落跡:鉄滓, 轆羽口	銅印出土

倭王権がこのような新興豪族層を直接的に掌握するために伝統的な格式をもつ墳形とされた前方後円墳の築造を認める方法をとった結果なのであろうか。それゆえに、「ドンダリの背比べ」的な小規模な墳形に強く規制されたのかもしれない。

向江田・和田地区での小型前方後円墳や横穴式石室墳の集中的築造は、この地域が主要な墓域(墓地区域)として当時の集団によって意図的に設定されていたのではないかと推測される。ではなぜ当地が選ばれたのであろうか。実は寺町地区の小盆地は当時陸路交通の要地でもあった背景を要因とした可能性が高いのである。

小型前方後円墳や横穴式石室墳の多くは寺町地区の小盆地を囲む丘陵上に築造

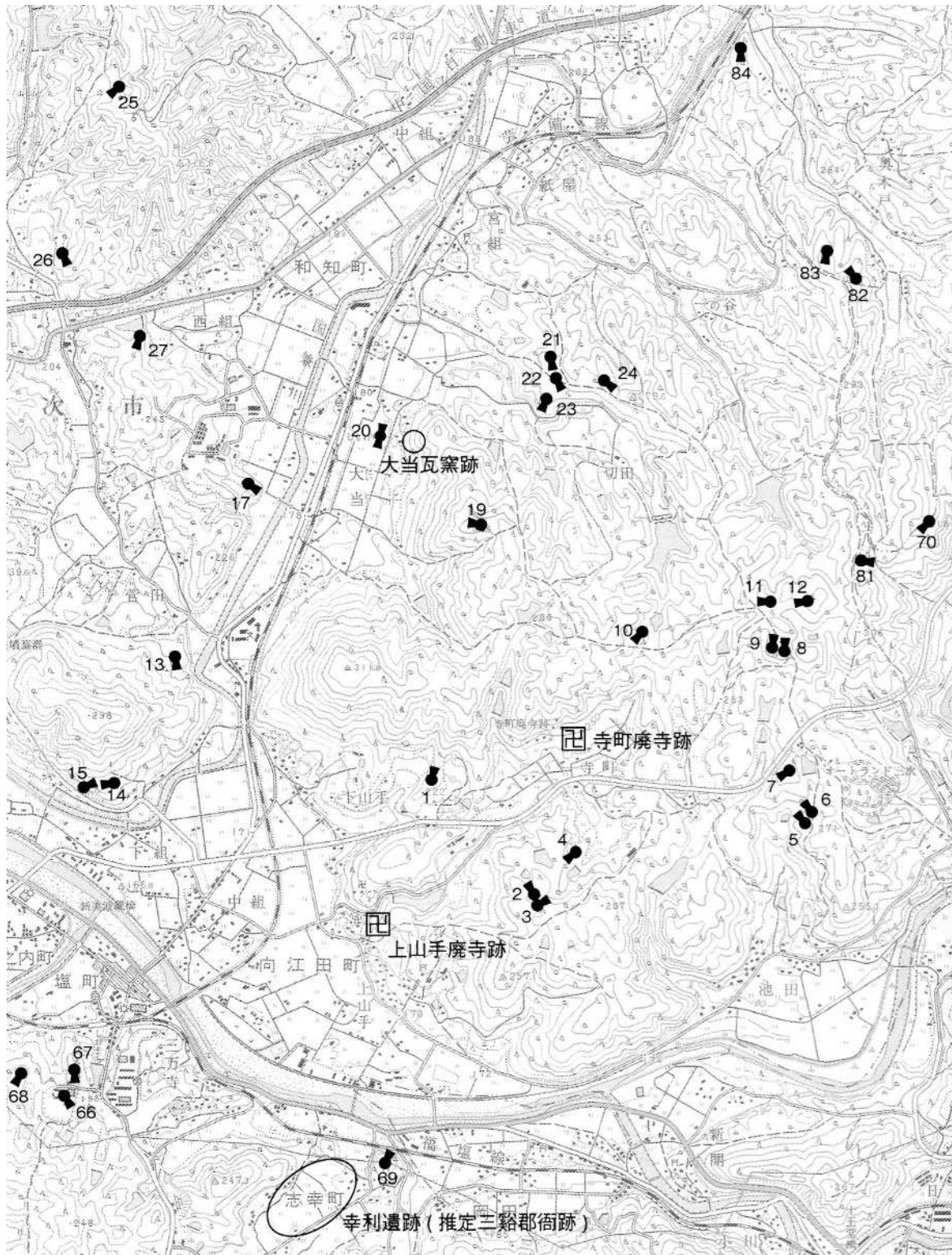


図 寺町廃寺跡周辺の前方後円墳位置図

されているのであるが、この丘陵地には古くから山尾根道や連結する谷道が繰り返し造られており、起伏の少ない山丘上の山道は庄原市の木戸・山内・七塚町及び

一木町（律令期の恵蘇郡や三上郡の領域）や三良坂の田利・仁賀・灰塚（三谷郡）方面へ通じる最短距離道ともなっているのである。しかも周辺域の丘陵地帯での鉄生産や鉄や鉄製品等の物資の運搬を考えると、三谷郡域内では地理的に上下川や馬洗川の渡河も最少で済むメリットも高いのである。おそらく、寺町地区は当時東西南北方向への山尾根道が集合する交通の枢要地に相当する場所であったのではないか。視界がほとんど開けない環境にある山中の山道沿いに古墳が並び点在するあり方は、まさに古墳が道標的意味をもっていたことを物語るのであろう。

したがって、寺町地区は交通路の要地であるがゆえに、6世紀代に墓域とされるときともに後には三谷郡三谷郷の中心的領域ともされたのではなかろうか。さらには以上のような背景が、狭隘な小盆地である当地へ寺町廃寺を創建する一要因にもなったと思われるのである。つまり、寺町廃寺創建に際して、山丘に囲まれた狭隘な小盆地とはいえ交通路の要地であり、かつ寺院建立者を守護してくれる祖先神―古墳群―を祀り供養する場所として意図的に選定されたのではなかろうか。

3 おわりに

以上、三次盆地に寺町廃寺が創建された歴史的背景を探るため、その前提的条件ともなった古墳時代の遺跡・遺物等の特色に窺える三次盆地と倭王権との関係性や渡来系要素の影響が色濃く窺える意味等について考えてみた。

おそらく倭王権や渡来系の人々の主導のもと、当時の先進技術によって盆地内の土地開発も大きく進展したものと思われ、池堤を築き谷奥までも開発・水田化された盆地内の原初的景観はすでに6世紀後半代には生み出されたと推測される。また、このような社会状況を背景に7世紀前後頃には鉄生産も行われており、その開始はさらに遡る可能性が高い。古墳時代のこのような社会背景や経済的要素が、寺町廃寺を三次盆地に成立させる要因へ連動したものと思われる。したがって、寺町廃寺跡の発掘調査によって明らかとなった際立つ希有な先進的要素は、すでに前時代までに培われた多様な社会関係を背景として生じた現象であったと思われる。

なお、『日本霊異記』によると「三谷寺」は「三谷郡の大領（最上位の郡司）の先祖」の祈願による建立とされる。しかし、周辺域の小型前方後円墳や横穴式石室墳のあり方からみると、単に大領の一郡司による氏寺ではなく、在地の複数の中小豪族層たちの力も結集した共立体制によって創建された可能性が高いと考える。

最近の調査では、寺町地区を西側へ抜けた下山手の丘陵斜面で7世紀前後頃の横穴式石室墳である箱山1号墳（円墳）から金銅装の「圭頭大刀」が出土している。また、菅田の谷に面した丘陵上の向江田中山遺跡では、7世紀前半～中葉頃の豪族居館、もしくは公的な役割をもつとも想定される整然とした柱並びの建物も発見された。周辺域での当時の官人的立場の人物の存在を示すものであり、今後の調査・研究の進展で寺町廃寺を支えた人々の姿がより明らかになると期待されよう。